

わ じま
輪 嶋 名 産
かい しゅ ぜん わん
皆 朱 膳 椀

下記の写真は家紋が入った漆器です(写真1)。漆器は日本の伝統工芸にも指定される工芸品で、木製の器などに漆(ウルシ)の木の樹液から作る液体)を塗り重ねて作られます。見た目の美しさだけでなく、機能性・耐久性に優れた漆器は伝統文化の一つとして長く受け継がれてきました。今回紹介するのは、朱色の器一つに家紋が描かれた輪島塗の漆器です。これらは長野家(長野商店)で所有していたものです。長野商店は、新潟県出身の長野徳太郎によつて明治7年に創業され、当時の石狩町(現在の石狩市本町地区周辺)を代表する商家でした。

漆器の箱には次のように記載されています(写真2)。「輪嶋名産/皆朱膳椀/五人前」「明治参拾七年甲辰八月拾六日求之/北海道石狩国石狩郡親船町南七番地/所有主 長野徳太郎」。ここから、この漆器が今から約120年前の輪島塗だと分かります。この箱には7点1組の漆器が5人分、つまり約35点の漆器が収納されていました。器は一つ和紙で包まれています(写真3)。

漆器は木箱に入れる前に、布製の袋などで包まれます。家庭で使う場合は、袋の代わりに和紙や新聞紙、



写真1

商店の場合は包装紙や台帳の古紙などを再利用する例も多く見られます。緩衝材などとしての機能もあり、利用しやすい身近なものを使用したのでしょう。見た目にも機能性にも優れた漆器ですが、長く使うためには適切な管理が求められます。土台となる器は木製が多く、何もしなければ経年でカビが発生したり、漆が剥離してしまつたりと状態が損なわれてしまうのです。

この長野家の漆器は損傷や剥離などもほとんどなく、大変美しい状態です。家紋入りの漆器は婚礼や正月など人々が集まる場で使用されたと考えられますが、大切に手入れされてきたのでしょう。(坂本恵衣)



写真3

長野家の漆器の一部は「旧長野商店」(弁天町30・5)でご覧いただけます



写真2



石狩市学芸員
坂本恵衣 Kei Sakamoto

専門は文化人類学。地域信仰について調べるとともに、石狩の人々の生活の中で宗教がどのように考えられていたのか、歴史的変遷などを研究する。